

В.А. Фатеев.

Н. Н. Страхов: Личность. Творчество. Эпоха.

СПб.: Пушкинский Дом, 2021. 652 с.

野 中 進

ニコライ・ストラーホフの名は日本でも知られている。ドストエフスキーとトルストイの評伝ではお馴染みの名前である。小林秀雄『ドストエフスキイの生活』でこの名を初めて聞いた人もいるだろう。小林は彼の手紙を取り上げている。長年の友人だったはずの「潔癖な哲学者¹」が亡き文豪の人格と素行を激しく非難した問題の手紙である²。

ヴァレリー・ファテーエフのストラーホフ伝もこの手紙問題が執筆の動機だという。この手紙のせいで今も責められることのある人物が、実は一流の思想家・批評家であり、立派な人物でもあることを明らかにしたいと言う。「この物静かな、だが真剣で勇敢な思想家を何としても擁護することが自分の義務だと考えた³」という文章が示す通り、「熱い本」である。また、思想家の生涯と思想に多方面から迫ったストラーホフ学の百科事典的書物でもある。

そもそも「ストラーホフ学」というものが存在するのか。上記の手紙の他、ド

¹ 小林秀雄「ドストエフスキイの生活」『新訂小林秀雄全集』第5巻、新潮社、1978年、97頁。

² 以下も参照：中村健之介「ストラーホフの『観察』」『理想』552号（1979/5）、52–68頁；木下豊房「ストラーホフの中傷」『ドストエフスキー その対話的世界』成文社、2002年、279–281頁；松本賢一「ニコライ・ストラーホフと「施し」の問題（1）（2）」『言語文化』7–4号（2005年）、387–414頁；8–2号（2005年）、285–312頁。

³ *Фатеев В.А.* Н. Н. Страхов: Личность. Творчество. Эпоха. СПб.: Пушкинский Дом, 2021. С. 4. 以下、本書から引用する場合は本文中、括弧内にページ数を示す。

ストエフスキーの『時代』誌への参加、トルストイとの長年の交友等が有名だが、彼自身の著作や思想については知らない人がほとんどだろう（評者も例外でなかった）。だが近年のロシア保守主義「ブーム」のおかげでストラホフへの関心は高まり、多くの研究書、論文、共同論集、学位論文が出ている。ソ連時代、ストラホフについて知ろうとすれば、米国で出たゲルシュテインの研究⁴くらいしかなかったが、今では状況が違うのである。

それでも、グリゴリエフやレオンチエフ、ダニレフスキー、ローザノフ等異色な（「キャラの立った」）保守思想家たちに較べれば、彼はいまだ目立たない存在である。この状況を変え、一流の思想家に正当な位置を与えたいというのが執筆の動機である。

ファターエフ（1941 生）は、浩瀚なローザノフ伝（初版 2002, 改訂増補版 2013⁵）の著者として知られる。面白いことに、初版には注がついておらず、引用文の出典が全く示されていない。読み物としてはよいが学術的には問題がある。その点を批判されたので「より『学術的な』版」を出すことにしたとのことである⁶。このことから察せられるように、著者は大学や研究所に属さない「在野」の研究者である。英語の翻訳を生業としつつ、独自にロシア思想史の研究をしてきたという⁷。とはいえ、在住のペテルブルグは勿論、ロシア各地の研究者たちと交流があり、ロシアのアカデミア、とくに保守主義研究の分野では高く評価されている。文献学の准博士号も持つ。

ローザノフ伝の次にストラホフ伝、というのは不思議な取り合せに見える。知る人ぞ知ることだが、ローザノフが文筆家として世に出たのにはストラホフの助力が大きいのである。ローザノフ伝を書きつつ、ストラホフへの関心も深

めてきたと序文にある。

ローザノフ伝が完全に時系列的な伝記だったのに対し、こちらはより評伝的なスタイルを取っている。二部構成で、第 1 部「ストラホフの人生と創作」は思想家の生涯と思索を論じた章から成る。第 2 部「『選ばれた頭脳たちから選ばれた対話者』」では 19 世紀後半のロシアの「偉大な」作家・思想家たちとの交流を各章一人ずつ描いている。650 頁を越える大著を読み通すのは正直大変なので、伝記情報を集めた第 1 章を読んだ後は、関心に沿って読む章を選ぶのが、本書との現実的な付き合い方だろう。

著者はストラホフの多面的かつ穏健な保守思想家としての意義を高く評価する。その意義はたんに思想史研究だけでなく、現代ロシアの社会的文脈でも評価されるべきだ、というのが著者のメッセージである。先ほど「熱い本」だと述べたが、評者は藤沼貴先生の晩年の大著『トルストイ』（第三文明社、2009）を思い出したものである。

以下、章ごとに内容を紹介する。

第 1 章「『流れに抗して進むのはつねに難しい』」。章題はストラホフ自身の言葉である。本章では伝記情報が時系列的に示されている。ニコライ・ストラホフは 1828 年、ロシア西南のベルゴロドに生まれた。父の早世後、四人の遺児とその母は親戚に頼った。ストラホフの伯父は高位聖職者で、遺児たちは神学校で学んだ。だがニコライはペテルブルグ大学理科に進み、聖職者の道を拒んだため、伯父の経済的援助を失い、学費免除の師範大学に移った。卒業後は古典学校で教鞭を取りつつ、動物学の研究を続けた。だが、モスクワ大学の動物学講座への就職に失敗した後、文芸・思想の分野に転ずる。論文「生理学書簡」（1858 年）がグリゴリエフやカトコフらの目に留まる。自然科学の知識を活かしつつも、唯物論に抗して観念論を掲げる姿勢が目立ったのだろう。グリゴリエフの推薦を得てドストエフスキー兄弟の『時代』誌に参加する。文芸批評・社会評論を担当し、進歩派の雑誌との論戦をくり広げた。

『時代』誌は商業的に成功したが、1863 年 4 月号に掲載されたストラホフの論文「運命的問題」のために発禁処分を受けた。ポーランド問題を扱った論文だが、筆者の意図が誤解され、政府の嫌疑を招いてしまったのである。後継誌

⁴ L. Gerstein, *Nikolay Strakhov*, Cambridge: Harvard University Press, 1971.

⁵ Фатеев В.А. С русской бездной в душе: Жизнеописание Василия Розанова. СПб.: Кострома, 2002. 640 с.; Фатеев В.А. Жизнеописание Василия Розанова. СПб.: Пушкинский Дом, 2013. 1056 с.

⁶ Фатеев В.А. Жизнеописание Василия Розанова. СПб.: Пушкинский Дом, 2013. С. 5.

⁷ Любомудров А. Валерий Александрович Фатеев // Энциклопедический словарь "Литераторы Санкт-Петербурга. XX век": <https://lavkapisateley.spb.ru/enciklopediya/f/fateev/> (閲覧 2021/6/14).

『世紀』は振るわず、一年で廃刊に追い込まれる。ストラホフは生計を立てるため、思想史・自然科学関連の翻訳のほか、ペテルブルグ公立図書館に就職し、1885年まで勤めた。

1868-71年、『曙』誌の編集を任され、「世俗的なスラヴ派」(33; 強調ストラホフ)の路線掲げる。『曙』誌には彼自身の文芸批評、ダニレフスキー「ロシアとヨーロッパ」、トルストイ「コーカサスの虜」等が載り、編集者として充実した時期である。

1872年には主著の一つ『全体としての世界』を出版。自然科学に関する論文を集めた本である。もう一つの主著『わが国の文学における西欧との闘い』(以下『西欧との闘い』)は文学・思想に関する論文を中心としており、全三巻(1882, 1883, 1896年)である。ちなみに彼の著書はすべて論文集であり、体系性の弱さが生前から批判されていた。

1860-70年代のロシア文壇では「進歩派」(急進派とリベラルの総称として)が圧倒的に優勢で、保守派のストラホフは軽んじられることが多かった。1880年代になってローザノフやゴヴォルハ＝オトロク等若い保守世代の登場後、ようやく一定の評価を得た。それでも保守派が文壇・論壇の主流を占めることはなかった。ソ連時代になるとストラホフらは「反動」のレッテルを貼られ、忘却の淵に追いやられた。状況が変わったのは1990年代以降である。

第2章「人格、性格、生活」ではストラホフの人となり述べられている。度を越して控え目な性格は、韜晦趣味にも見えたという。生涯独身だったが、友人との交際を好み、彼のアパートには若き日のドストエフスキーやグリゴリエフ、後に仇敵となるウラジーミル・ソロヴィヨフらが通った。オペラ観劇を好み、帝都の文化的生活を愉しむ一方、静謐な暮らしを愛し、修道土的雰囲気さえ漂わせたようだ。他人の思想を深く理解する能力によって多くの人々に評価され、愛された。思想だけでなく、人柄においても多面的な人物だったことが強調されている。

第3章「ストラホフの生涯と業績における自然科学」では、自然科学(とくに動物学)への関わりについて述べられている。1857年の学位論文題目は「哺乳類の手首の骨について」だった。文学・ジャーナリズムに転じた後も、著述の

かなりの割合を自然科学のテーマが占めている。

『時代』創刊号に掲載されたのは論文「惑星の住人」(1861年)である。宇宙には人類に匹敵するほど進化を遂げた生命が存在するかという問題を論じている。彼の答えは否定的で、人類を地球のみならず宇宙全体の精華と見ている。著者はロシア・コスミズムの議論を先取りする要素を含むものと評価する。

科学論におけるストラホフの論敵は、原子論とダーウィニズムだった。彼の考えでは、原子論は世界の全体性ないし有機的統一を見ようとせず、またダーウィニズムは進化の目的論的契機を否定する点でそれぞれ誤っている。こうした議論には彼の有機的・目的論的な自然観が現れている。だが、原子論やダーウィニズムは当時の論壇で支配的であり、彼はここでも不利な闘いを強いられたのである。

第4章「文芸批評家としてのストラホフ」。ストラホフが本格的(職業的)に文学に関わり出したのは30歳頃、『時代』誌に参加してからである。彼の文芸批評の師はグリゴリエフであり、芸術と生の有機的結びつきという理念を受け継いだ。『曙』創刊号に発表した『戦争と平和』論(1861年)は、当時まだ評価が定まっていなかった長編小説の意義を論じたものである。またプーシキン論では『大尉の娘』と『ペールキン物語』をとくに高く評価し、ロシアの民族性を十全に描いた作家というプーシキン像を打ち出した。論敵たちは彼の文芸批評に冷淡で、「純粹芸術派」や「美学者」(ピーサレフ)というレッテルを貼った。ローザノフたち若い保守派が登場して、ようやく彼の文芸批評が正当に評価されるようになった。

第5章「有機的理解の哲学、あるいは『すべてを理解する哲学者』」はストラホフの哲学的著作を扱う。若いころはヘーゲル哲学の影響下にあったが、徐々に独自の世界観・人間観に基づく立場を築いた。それは世界を有機的全体として見つめ、その中心に人間を置く立場である。だが著者によれば、自然の頂点としての人間という考え方とともに、神の創造物としての人間という思想がストラホフにはあった。だが『全体としての世界』ではその思想は十分に展開されていない。

ちなみに、哲学者ニコライ・ロスキーが形而上学に関する著作を出すに当たり

『全体としての世界』という題名を考えたが、ストラーホフの本があることを知り、『有機的全体としての世界』に変えたという逸話がある⁸。「全体性」の理念が世紀転換期の一部の思想家たちを惹きつけたというのは興味深いことである⁹。

著者も惜しむ通り、ストラーホフは自分の原理を完全に言い切ることをしなかった。そのため生前から「折衷主義」という批判があったが、研究が進むことで彼の哲学者としての真価が明らかになるだろうと締めくくられている。

第6章「ニヒリズムと『啓蒙もどき』との闘い」はストラーホフのニヒリズム批判を扱う。「啓蒙もどき」と訳したのは просвещение というストラーホフの造語である。ここでいうニヒリズムとは1860年代以降の「あらゆる価値の否定、より歴史的意味では、大学生たちの反政府的な社会政治的傾向」（189）を意味する。ストラーホフにとってニヒリズムはロシアの深刻な問題だった。『父と子』に関する論文では、この小説がロシア社会を客観的に描いていると評価している。また、アレクサンドル二世暗殺直後に書かれた論文「ニヒリズム書簡」（1881年）では、ニヒリズムとは政治的・民族的敵意というより「幻想的な憎しみ¹⁰」であり、だからこそいっそう恐ろしいと述べている。

彼にとってニヒリズムとの闘いは、ロシアの民族的独自性を守るための闘いだった。西欧の思想・学問に通じた上で、民族的独自性の称揚に至ったという点で彼はスラヴ派の伝統を継ぐ者であり、チュッチェフにも通ずるものがある。ストラーホフの考えでは、ニヒリズムの病いを癒す薬は「ロシア的なもの」の発見、「土壌」への回帰において他にないのである。

当然、こうした立場は進歩派が支配的だった当時の文壇では劣勢だった。ミハ

イロフスキーは「多くの人々はストラーホフ氏のことを滑稽な作家と見ることに慣れており、ドン・キホーテに喩えている」（199）と嘲った。そればかりか、皇帝暗殺後、親しかったトルストイやソロヴィヨフが犯人たちの助命嘆願を行ったことにショックを受け、彼らとの関係に不協和音が生じた。それほどストラーホフの立場は少数派だったのである。

第7章「ロシアと西欧——『土壌主義』の観点」はストラーホフの保守思想を概観する。彼はグリゴリエフとドストエフスキーとともに土壌主義を育て、スラヴ派の発展的継承を試みた。この分野での主著は『西欧との闘い』である。題名から予想されるのと違い、西欧の思想家たち（フォイエルバッハ、ルナン、テース等）に関する論文もある。またロシアに関しても、ダニレフスキーのような思想的同志だけでなく、ゲルツェンやベリンスキー等も取り上げられている。実際、ストラーホフは「隠れ西欧派」（241）と非難されることもあったほどで、彼は西欧の哲学・科学を学ぶことの重要性をつねに認めていたのである。

なお、1882年に出版『西欧との闘い』第二巻は著者自身が驚くほど売れ行きがよく、世紀末に向けてロシア社会の雰囲気が変わりつつあったことをうかがわせる。

第8章「ストラーホフの『内気な』宗教性」。ストラーホフは自分の信仰について語ることはおろか、一般に神の問題を論じることも稀だった。そのせいで「合理主義者」と称されることもある。それに対して著者は、深い宗教性を湛えた思想家としてのストラーホフ像を打ち出す。これは近年のストラーホフ・ルネサンスの主傾向でもある。実際、ストラーホフは『キリストのまねび』をいつも手元に置いていたという。オプチナ修道院やアトス山も訪れている。トルストイへの手紙には「あらゆる生命は神から直接発しており、神は小さな草木も偉大な人間の心も同じように育てていると、私は喜んで言いましょう」という言葉がある（254）。しかしこうした考えを公言し、発展させることはなかった。

以上で第1部が終わり、第2部『「選ばれた頭脳たちから選ばれた対話者」』に入る。このタイトルはローザノフのストラーホフ評から取られている。各章一人ずつ、関係の深かった人物を取り上げ、彼らとの交流や衝突を論じている。

第9章「預言する者たちのはざまで醒めている者、あるいは2×2はつねに4

⁸ 以下も参照。ただしロススキーはストラーホフの著作に低い評価しか与えていない：*Лосский Н.* Воспоминания: Жизнь и философский путь. М.: Викмо-М, Русский путь, 2008. С. 177–178.

⁹ 「全体性」の希求が一部のソ連文学に引き継がれたとする中村唯史の論考も参照：*Накамура Т.* Мечта о мире как органическом целом в литературе советского периода: анализ «Красной птицы» Ю. Казакова, «Дневных звезд» О. Берггольц и др. // Гречко В., Ким С., Нонака С. (ред.) Дальний Восток, близкая Россия: эволюция русской культуры — взгляд из Восточной Азии. Белград: Логос, 2015. С. 119–134.

¹⁰ *Страхов Н.Н.* Борьба с Западом в нашей литературе. Кн. 3. СПб., 1883. С. 213.

か？」は導入的な章である。著者によれば、もともと本書は『預言する者たちのはざまに醒めている者：N. N. ストラーフと偉大な同時代人たち』という題にしたかったが、編集者に断られたという¹¹。ストラーフ自身、自らを「熱に浮かされた者たちのなかで醒めている者の一人」（288）と称したこともある。

第10章「ロシア批評の二人のドン・キホーテ（ストラーフとグリゴリエフ）」。「私は永遠のドン・キホーテだ」（295）というのはグリゴリエフの言葉だが、ストラーフも論敵たちにドン・キホーテ呼ばわりされた。二人とも時代に合わない理想を掲げ、闘い続けた闘士だった。

ストラーフは年長の友から多くのことを学んだ。とりわけロシアの民族性の体現者としてのプーシキンという考えはグリゴリエフに発している。1880年のドストエフスキーのプーシキン演説もまた三人の思想的対話から発していると著者は見る。

1876年、ストラーフは早世した友人の著作集を出し、序文でグリゴリエフの思想と批評の意義を強調した。ロシアの文芸批評ではベリンスキー、ドブローリユーボフ、チェルヌイシェフスキーの流れと並んで、グリゴリエフ、ストラーフ、ローザノフの流れがある。今日、後者の再評価が進んでいることを著者は歓迎する。

第11章「『分けへだてのある』友人たち（ストラーフとドストエフスキー）」。「時代」誌の頃のドストエフスキーは後年ほど保守的ではなく、むしろグリゴリエフとストラーフの方が保守的だった。批評家たちが作家に与えた影響については多くの議論がある。1862年、ドストエフスキーとストラーフはフィレンツェで数日をともに過ごした。その時二人は、2×2はつねに4かという議論を交わしたと伝えられる。この議論は両者にとって重要な問題を孕んでいた。ただし著者の考えでは、この議論が両者の人間的・思想的断絶にまで至ったとするL. ローゼンブリュムの意見は一面的である。ストラーフは重要な『罪と罰』論（1866年）を書いており、ドストエフスキー文学を高く評価していた。ただ、ドストエフスキーが『白痴』についても論文を期待していたのにスト

ラーホフが応えなかったこと、他方『アンナ・カレーニナ』は絶賛したことなどがあって、作家は猜疑心を募らせた。1876年の創作ノートには友人の不誠実さや才能の乏しさについて激しい悪口がある。ストラーフもむら気な友人への不満があった。

それでもストラーフは『悪霊』や『作家の日記』を称賛する手紙をドストエフスキーに送っている。また作家も『永遠の夫』をストラーフの『曙』誌に載せており、生前の両者の関係はますます良好だったと言ってよい。

しかし、1883年のトルストイへの手紙が1913年に公表されたことで、すべては意味を変えてしまった。ドストエフスキーがスヴィドリガイロフやスタヴローギンまがいの悪行をしたという記述を含む手紙はロシア社会に衝撃を与えた。ただし文豪についてのこの種の噂は以前からあり、心理学教授から匿名記者に至るまでさまざまな立場から記事が出ていた。ストラーフも、作家がそうしたことを自慢気に語っていたと知人から聞いたと書いているにすぎない。それでも、この手紙には長年抑えていた嫌悪の念を吐き出した迫力があり、ロシア文学史上最も悪名高いドキュメントとなったのも無理はない。著者は、この事件は「悲しむべき」（387）ことだと述べる。ストラーフ擁護という本書の執筆動機が最も強く（また見方によってはあまりに直截に）現れた章である。

第12章「『彼のことは感動なしには思い出せない…』（ストラーフとダニレフスキー）」。「1868年、ニコライ・ダニレフスキーは「ロシアとヨーロッパ」という大部の原稿を持ってペテルブルグにやって来た。様々な経緯を経て、ストラーフが編集する『曙』誌への掲載が決まる。「ロシアとヨーロッパ」は『曙』誌の看板連載となった。「なぜヨーロッパはロシアに敵対的か」という問いを掲げた問題作は大きな反響を呼んだ。著者の考えでは、『曙』誌において土壌主義はさらなる発展を遂げた。そこではストラーフとダニレフスキーが中心的役割を果たしたのである。

二人は反ダーウィニズムでも共鳴し合い、ストラーフは友人の遺稿となった『ダーウィニズム』の出版に尽力した。ダニレフスキーをめぐっては、後にストラーフとソロヴィヨフの間で激しい論争が勃発する。

第13章「ひざまづく友情（ストラーフとトルストイ）」。「トルストイとの長

¹¹ 2020年11月28日の著者より評者あての電子メールから。

年の交友はストラホフの生涯と思想にとって最も重要な出来事だった。彼らの往復書簡はロシア書簡文学史上、特筆すべき傑作である。

偉大な友へのストラホフの献身的友情についてはよく知られている。農民向けの教科書『アズブカ』の編集、『アンナ・カレーニナ』のエピローグ（カトコフに雑誌掲載を断られた）の出版等がとくに有名である。こうした献身が災いして、ストラホフは大作家の生涯の「背景的人物」としてしか見られていない。だがトルストイは謙虚な友人が一流の思想家・文筆家であることを見抜いており、だからこそ二人の交友は豊かなものとなった。とはいえ、ストラホフには「偉大な」思想家になるためにもっとも大切な、「同時代人の沸き立つ意識を引き寄せる強い社会的情熱と肯定的綱領」(445)が欠けていた。本人もそのことを知っていた。

本章を読んで評者が思い出したのは、アイザイア・バーリンの『ハリネズミと狐』である。バーリンによれば、トルストイは自分のことをハリネズミ（大事なことを一つ知っている）だと思っている狐（多面的な才能）である¹²。ストラホフはといえば、自他ともに認める狐で、だからこそトルストイはストラホフを愛したのではないだろうか。

第14章「友好的関係から理念的対立へ（ストラホフとソロヴィヨフ）」。「長年、この二人は比較にならない存在だった——二人の生前、銀の時代、ソ連時代、そしてソ連解体後も。21世紀に入ってようやく両者の関係についてより公平な見方がされ始めている。

ソロヴィヨフの学位論文「西欧哲学の危機 実証主義に抗して」にストラホフは強い関心を示し、論文審査にも出席した。個人的な交際も始まり、一時期は年の差を越えた友人だった。だが皇帝暗殺後のソロヴィヨフの行動をストラホフは批判し、カトリックへの宥和的態度にも否定的だった。降神術への態度の違いも興味深い。ストラホフは降神術を批判する論文を多く書いた。対してソロヴィヨフは、年長の友人の合理主義的議論は「あらゆる奇蹟、つまりは宗教に反

する」ものだと決めつけた(478)。だがこれは、ストラホフの論点を取り違えている。彼は、数学や物理学によって構築される経験的世界に奇蹟や非合理を容れるべきではない、と主張したのである。

1888年、ソロヴィヨフはダニレフスキーを批判した論文「ロシアとヨーロッパ」を発表する。ここから数年にわたるストラホフとの論争が始まった。ソロヴィヨフのダニレフスキー批判はスラヴ派第二世代全体の批判でもあり、ストラホフとしては譲れない闘いだった。論文「わが国の文化と全世界的統一」(1889年)等で応戦し、ソロヴィヨフは民族性の意義を否定していると批判した。ストラホフにとって、民族性は世界性によって乗り越えられるべき理念ではなく、それに先立つべきものであった。しかし、論争はソロヴィヨフの圧倒的優勢に進んだ、というのが大方の評価である。

著者の考えでは、この論争は西欧派とスラヴ派、革新と保守、世界性と民族性というロシア思想史の原型的構図を有している。だがソロヴィヨフの知的カリスマに惑わされた同時代人たちは、この論争の真価を理解しなかった。その再評価を行うことは今日的課題である。

第15章「『三分の二の同志』?（ストラホフとレオンチエフ）」。「レオンチエフはロシア史上、最も謎と矛盾を孕んだ思想家だろう。そのレオンチエフがストラホフを「三分の二の同志」(507)と呼んだのは興味深いことである。だがストラホフの側は距離を置き、『曙』誌に彼の論文を掲載することも断った。レオンチエフ思想の特徴である「厳格な宗教性と耽美主義の結合」(512)が受け入れがたかったのだろうと著者は推測する。それでもレオンチエフの主著『ビザンツ主義とスラヴ主義』(1876年)の好意的な書評を書いている。また彼の文学作品は高く評価した。

この二人を別のしかたでつないだのがローザノフである。地方都市の学校教師をしていた若きローザノフは彼らと文通をしていた。文壇デビューやペテルブルグ移住等で助けられたこともあり、ローザノフはストラホフに感謝し、尊敬もしていた。だがレオンチエフの知的風貌の異彩にはそれ以上に魅かれた。実際、自由な文章、大胆な発想等の点でローザノフはレオンチエフにずっと近い。

第16章「『永遠の教育者』の自由な、しかし感謝を忘れぬ弟子（ストラホフ

¹² I. バーリン『ハリネズミと狐』『戦争と平和』の歴史哲学 河合秀和訳、岩波文庫、1997年、10 - 12頁。

とローザノフ)」。後進の思想家でストラーホフがもっとも親しくつき合ったのはローザノフである。世に黙殺された処女作『理解について』(1886年)に好意的な反応を寄せたところから文通が始まった。ほとんど30も年の違う二人を近づけたのは「進歩的」世論からの疎外感だった。

ストラーホフはこの無名の文筆家の才能を見抜き、支援した。ローザノフの出世作「ドストエフスキーの大審問官伝説」(1894年)は彼の推薦を得て発表されたものである。文筆だけではまだ生計を立てられないローザノフのためにペテルブルグでの仕事を斡旋したのもストラーホフである。

ローザノフは師を越えたと言ってよいだろう。銀の時代が花開くと、シンボリストたちとも交わり、独特な芸術論を展開した。彼のエッセイは新しい時代感覚にマッチし、性愛の哲学や大衆的な保守主義によって人気評論家となった。ストラーホフとは違う時代を生きたとも言える。

第17章「ロシア文化史におけるストラーホフの位置」では全体をまとめている。本書の主張をくり返すと「ストラーホフはロシアの文学・思想のもっとも輝かしい代表者の一人ではないとしても、疑いなく、ロシア文化史上しかるべき地位に値する」(561)となる。『全体としての世界』は自然哲学への、『西欧との闘い』は保守主義への重要な貢献である。また文芸批評、論争、翻訳、雑誌編集等で19世紀後半のロシア文学に大きな寄与をした。

こうした功績にも拘らず、20世紀のストラーホフ評価は不当に低かった。亡命者の間でも同様である。例外としてはD. チジェフスキーが『ロシアにおけるヘーゲル』(独語、1934年)で彼に一章を割り、高く評価している。

最後に、近年の活発な出版や研究状況について紹介されている。生地ベルゴロドがストラーホフ研究の拠点となり、定期的に関連学会が開催されているとのことである。また今年、本書に続くように、「Pro et Contra」叢書でストラーホフの巻が出た。ストラーホフ学はようやく育ちつつある。

著者も認める通り、ストラーホフを「偉大な」、超一流の思想家と称するのは難しい。だが、時代の一流をなしたとは確かに言えるだろう。とりわけ彼の控え目な人柄、理解力に秀でた知性が生み出した人的ネットワークがロシア文学・思想の多くの出来事と結びついていることは、著者が力強く描き出した通りであ

る。本書はストラーホフ学だけでなく、ロシア保守主義研究の分野でも必携の書となるだろう¹³。

(のなか すすむ)

¹³ 本稿の執筆では望月哲男氏のご教示を頂いた。記して謝意を表する。